学習院大学新聞

発行所
学習院大学新聞社
東京都豊島区目白
1丁目5番1号
電話(986)0221内線260
発行・編集責任者
岩野和仁

合格
特集号

「百年」募金
振興会費

寄付する必要ない

不足分を学生に転嫁

募金徴収率はいずれも低調

現在、院当局が行っている「百年」記念事業募金（以下、「百年」募金）と学習院振興会費（以下振興会費）の寄付依頼書は、入学手続書類と同封されているため、強制と思うものが多い。また「入学後に差別されるのではないか」という危惧から募金をしてしまったという例もある。しかし、当局は「寄付はあくまでも任意で払う払わないで入学後に差別はない」との不安を打消している。さらに、学生納付金も、「百年」事業による赤字の埋めあわせや値上げの実質的理由としている以上、学生は家計にも大きな負担をかける募金に協力する必要はない。

「百年」募金は、入学後も未納者父母に対し依頼書が何度も送られてくるため、在学生の間からも依頼方法に批判の声が高い。しかし、募金をしたがしないかで入学後に差別されないことは、在学生の声からも明らかである。そしてこれらの募金の、在学生による募金率は「百年」記念事業に対する反発を反映してか、「百年」募金が六〇％、振興会費が五五％（当局発表）と、いずれも低調な様しか示していない。

「百年」募金は、「百年」記念事業建造物の建設費などを充当すること目的として、学生父母及び卒業生から二十億円、一般企業から三十億円の総額五十億円を目標として、七四年より、七七年の終了を目途として開始された。その後、「百年」記念事業は、建造物が七九年度ではほぼ建造が完了、事業の推進母体である記念事業委員会も八〇年五月に解散、税制措置上の制約がある企業募金も同時に終了し、現在学生父母に対する募金のみが行われている状態である。

しかし、募金総額は現在でも四十四億七千万円（当局発表）と、目標額にはまだ五億円あまりの不足をかかえている。さらに、そのうち父母関係は二十四億七千三百万円（同発表）を占めており、企業募金の目標額への十億円にものぼる不足額が、学生父母の負担へと転嫁されていることは明白だ。

また、記念建造物の総工費は当初の予定を十一億円あまり超える赤字を出しており、このような当局の見込み違いが、さらには学生父母への負担を強化する要因となっているのである。

また、振興会費は、「院の固定資産の維持と改修」を目的として七一年より開始されたものであるが、具体的使途は募金者にもほとんど明らかにされていない。しかし、学生納付金（学費）においても、「百年」記念事業による建造物の「充足」などを直接の理由として、維持費が各学部ごとに二万円から四万円ずつ値上げされている。したがって、振興会費をふくことは、維持費を二重に徴収されることになる。

現在、国政レベルにおいても、大型消費税の導入が示唆されるなど、大衆からの収奪が強化されている時点で、学生の利益とへだたったところで行われた「百年」記念事業の負担を、これ以上負う必要は、私たちには全くない。

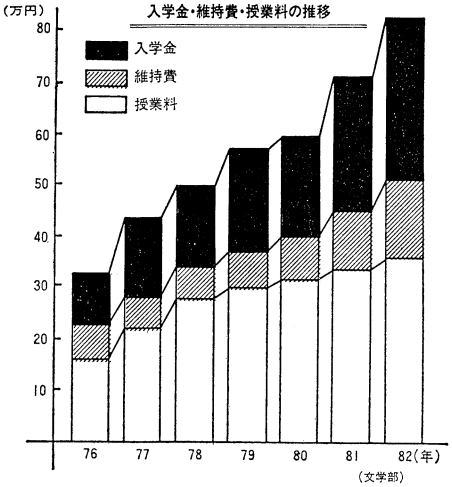
82年度学費

理系では百万円を突破

八年間で約三倍にアップ

八二年度新入生の学生納付金は一挙に百十万円を越えることになった。この値上げは一昨年の十一月にすでに発表されており、消費者物価上昇率の七・八％（八〇）を越えた上げ幅である。

八一年度比べ文系で約一五％、理系では約四〇％の値上げとなり文系で八十万円台を突破、理系では一年平均」を越えた上げ幅である。これで七五以降八年連続の値上げで、支払い額は当時の三倍にものぼる。（グラフ参照）



（文学部）

年度	入学金	授業料	初年度維持費	初年度納入金
76	10（万円）	16（万円）	7（万円）	346,800（円）
77	15	22	7	456,800
78	15	28	7	517,800
79	20	30	7	583,000
80	20	32	8	612,500
81	26	34	12	732,500
82	32	36	15	842,500

（文学部）

「百年」記念事業

延命策としての大学再編

産業界からの要請に呼応

「百年」記念事業は、七三年の「百年」記念事業委員会の結成で本格的にスタート、八年あまりの年月と五十億を超える巨額の資金を投入して行なわれた。教育研究施設の整備拡充・緑化計画・「百年」史編纂・財政改革などの四つの柱とし、これに沿って記念会館・文研・理研など記念建造物が次々と建設され、従来の施設との有機的配置がなされるなどキャンパスの改造が進められた。また全学科に大学院の設置、LL教育、カリキュラムの再編など機構、教育内容の面においても大幅な改編がなされた。

このように「百年」記念事業は物的施設から具体的な教育内容にまで及ぶ総合的な学内の合理化、再編成化であり、まさに「移転なき移転」をめざした事業であった。では、こうした事業が何故行なわれ、その背景にあるものは一体何であったのだろうか。

六十年代を通しての高度成長期安価な労働力と高度な生産性で海外に進出していった日本資本は、七十年代にはいると韓国など中進国の進出、先進諸国との経済的摩擦など、国際市場において競争に立たされることになった。このような状況の中で、政府は産業構造の新たな転換に迫られ、知識集約型産業（電子計算機、航空機などの研究開発集約産業と情報処理などの知識産業）を基軸に新たな活路を見出していく。七二年の中教審最終答申では、こうした新しい産業構造を担なう人材の養成を狙いとし、高度な専門技術者などの忠実な奉仕者になる人間の育成をめざした。「研究と教育の分離」と高度な研究が新設された文・理学部で他学部よりも上げ幅が大きいこと⑥入学辞退者がいるため当局にとって最も安易な増収策である入学金が六万円も上がり三十二万円になっていること――などがあげられる。

この値上げの理由を大学当局は「最近の大規模な教育研究施設の充実のため」に必要である学生がそれを負担するは「やむを得ない」と説明している。しかしこの理由となっている巨額な赤字（八〇年現在で約十七億）にものぼる）の大部分は「百年」記念事業関連工事やそれによる維持、償却費の増大によるものであり、これらは「百年」記念事業を行わなければ必要なかった支出である。また一昨年六月に院において「百年」会計と一般会計の区別がなくされたことをも考え合わせると、学費を「百年」の赤字埋め合わせに流用していることは否定できない事実だろう。

今回の値上げの特徴点は①授業料、維持費、入学金などを項目に渡るものであること②義務費が研究費の確保とする「研究施設の整備」が打ち出され、大学が目的別類別化に再編成されることになるのである。

こうした動きを背景として、それまで一定水準をもつ労働力を作り出し、最大の拡大を進めてきた私立大学は、七十年代からの経済の低成長下の中で質的転換をせまられた。

加えて大学進学率の低下などで高に私大間の競争が激化し、資本が要請する教育内容と施設を保障し、よい就職口を確保しうる大学への転換がはかられることになった。

こうした動きが全国的規模で行われ、キャンパスの移転、○○記念事業など大学の再編化を促すことになるのである。そしてこの状況下、学習院が選択したのが、創立「百年」を契機とした学内再編事業であった。

「百年」記念事業は、このように産学協同体制の要請を受けて"私大"としての存続の危機の中で行なわれた大改編事業であり、学習院の独自性（売りもの）の追求でもあったのである。しかもその本質は、私学資本「学習院」がとった延命策に見あう"設備投資"であり、募金強要、学費値上げなどの収奪強化、さらには学生に対する管理強化をも伴う学内の「改悪」にほかならないのである。

在学生の声

「払わなかった」

「差別はされない」

過去、学習院当局から寄付の要請を請けさせた在学生は、「百年」募金・事業に対してどのような意見を持っているだろうか。学生の率直な声を聴いてみた。

▽学部科四年　N君
親も自分もいっさい寄付金は払わないことにしていました。三年間に度も来た依頼状も無視しました。払わなかったことで差別はなかったなたいです。「百年」事業施設は学生への還元もはっきりしない疑問ですね。

▽中学科一年　S・Nさん
任意が強制かは知らなかったけど、もったいなかったから払っていません。学費でさえも高いのに余計なお金は使いたくありませんでした。

▽数学科一年　M・H君
払っていません。でも催促の手紙は、払わなければならないような文面で親を錯覚させるから止めて欲しいなぁ。

▽法学科二年　C・Iさん
払いました。推薦入学だったし大学寄付の義務は当然だと思ってました。

▽英米文学科一年　Mさん
寄付しました。入学手続を全て親にまかせていたのでついい……。払わなければよかったと思います。親に無理させることもありませんしね。

▽政治学科一年　O君
推薦入学者のためのガイダンスで、最後に当局から「よろしく」といわれたような気がします。だけど「百年」事業の背景を説明し見返りを請求して払いませんでした。

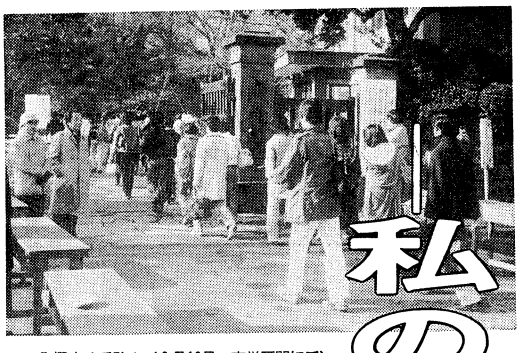
▽経営学科一年　A君
払っていません。「百年」記念会館も学生の利用できるものではなく、外に向けての宣伝効果を狙った以外のものじゃないようですし。払ったから得したという話は聞きませんね。

▽政治学科一年　H・A君
払わなかった。親は何も知らずに払おうとしたけど、高校の先輩から募金の概要を聞いて払う必要がないと判断しました。「百年」募金は学生に何の恩恵も与えない。借金の穴埋めじゃないの。

▽経済学科一年　S・Iさん
払っていました。入学手続の手紙は、（八〇年現在で約十七億）にものぼる）の大部分は「百年」記念事業関連工事やそれによる維持、償却費の増大によるものであり、これらは「百年」記念事業を行わなければ必要なかった支出である。また一昨年六月に院において「百年」会計と一般会計の区別がなくされたことをも考え合わせると、学費を「百年」の赤字埋め合わせに流用していることは否定できない事実だろう。

楽しさと、戸惑いと

私の大学一年間



入構する受験生（2月18日・本学正門にて）

序章　めでたさも中くらい

灰色の受験生活の後にやって来る春は、格別に晴やかだ。

約一年前、私は入学手続きのため、入試以来初めて校門をくぐった。入試の時の雪景色とはうって変わった緑豊かな構内。東京の真ン中で木もれ日を浴びるとは思っていなかったから、心はウキウキしていたが、手続きする時に、不思議と引き締まった気持ちはしなかった。そう、その時はまだ第一志望校の発表はされていなかったのだ。ソ十万が無駄になることを祈り（？）つつ、私は覚悟を提出した。

だが、その祈りは裏切られ、おかげ様で晴れて学習院大学に入学することになったのだ。

一章　新しい旅立ち

入学式の前から健康診断などで大学へ行った。キャンパスの至る所に、キャバレー顧客向けのサークル勧誘員がいて、たちまちパンフで両手がいっぱいになった。サークル棟の部室では楽しそうなことをあれこれ聞かされ、私たち一年生の悪はなくらむ―。友だちの中には早々とサークルを決めて、もう部室に入りびたっている者もいる。そんな中で少々ひねくれ者の私だけが、ひっそりとした「大学新聞社」のドアをノックしたのだった。

学習院大の良い所は、樹木が多いことである。入学式は、キャンパスの桜が満開になる頃に行なわれる。その式次第に吾が代斉唱があった。これは、貴族の学校というイメージを思い出させて、私には何となく不快であった。今だに学習院を貴族の学校と思っている人がいるが、学生の中には、このことに反感を持っている人が結構多くいるようだ。

四月中は、あちこちで新歓コンパが開かれる。目白界隈は、入学式の後から運員だ。酒の席で先輩たちは、「語学にさえ出席すれば、あとは何とかなるから心配するな」と明るく言う。ああ、大学の授業とはそんなに甘いものなのかな―。

新しい生活の楽しさにとらまれているうちに、前期はあっという間に終わってしまった。

二章　メインは大学祭

前期試験は七月中に終わり、夏休みは、七月末から九月末まで二ヵ月ある。生まれて初めてバイトを経験した。家庭教師である。わからない英単語が出てくると、内心ヒヤリとしながらも、「自分で疑問を引く習慣をつけなければ」と、かわす技術も会得した。友だちもほとんどバイトをしている。大学生にバイトは不可欠なのだ。

十月に入ると、学内が急に騒々しくなる。学内最大のイベント、大学祭があるからだ。この頃になると、私もバリキョウ（一般教養課目）のいくつかに穴をあけた。でも罪悪感をあまり感じないのだから恐い。ああ、あの勤勉な高校生だった私はどこへ行ってしまったのだろう。

大学祭の見ものは、前夜祭のみこし行列。思い思いの装飾を施したみこしが目白通りをねり歩くのは壮観だ。また、期間中は「のんべえ横丁」という出店街もあり、屋間から酔っ払っている人たちもいる。後夜祭になると、ピラ校前のステージで学生みんなが踊り狂い、大学祭の興奮はピークに達する。普段は大人しい友だちが、気が付くと踊りで踊っていたのには驚いた。

後期になると、各サークルでは一年生も一人前に扱われるようになる。新聞社でも一年生が記事をいくつか受け持つようになった。

三章　要領良ければ優等生

年が明けると間もなく後期試験である。ほとんどの課目が後期試験のみで成績が決まるからタタ事ではない。単位を落として留年の浮目になるされるのは、誰だって いやだ。学内は、ノートの話でもちきりになる。私もその例にもれず、コピー屋に日参した。コピー代もバカにならないが、これも単位のためと思ってしまう。でも、そんな自分がだんだんセコく感じられて、コピーの山を削して自己嫌悪に陥ることしばし。

試験の監督は厳しいらしいが、中には、問題を予告してもらえる課目や、持込み自由の課目がいくつかある。このあたりが、高校までの試験とは違うところ。要領が良ければ、一回も出席しなくて〝優〟を取れる場合だってあるそうだ。でも、こんな感じで四年間の大学の「学問」が終わるのかと考えると、さすがに疑問が残ってしまう。

終章　すべてが自分次第

あれこれ戸惑いながらも、一年はあっという間に過ぎた。この一年で大学に対する私の考えは、かなり変わった。大学は、決して私たち学生に親切な所ではない。大学を利用する位の気概をもって主体的に動しなければ、結局私たち学生は大学から何の益も得られないのだ。そう考えると、大学生活もこれまでとは違う意味で、厳しいものなのかもしれないと、私は最近考えるようになった。大学生活を有意義なものにするには、自分が一体何をしたいのか、いつもはっきりさせておくことが必要なのだと思う。

（東方紀）

去年のクリスマスは、綿切りに追われて、寒い社業で迎えた。休みがつぶれた不平はつのったが、自分の記事が活字になってしまうとまた作りたいなんて、つい思ってしまう。（面白くない授業を聞くより、サークル活動している方が私には……）とまで思えてくる。

読書紹介

『企画の技法』

加藤秀俊 著

現代こそは「企画」の時代

集団思考による立案を目指す

現代社会の動力源として存在する「企画」。国の政策、企業の新製品開発、広告、ジャーナリズムなど、すべてが「企画」である。そして、個人でさえも、生きるために企画し、企画するために生きている。あたらしさの設計たる「企画」とはそれほど我々に密着している。そして優秀な企画創造能力を有することが、個人、集団ともに今日最も要求されているといっても過言ではない。

本書は、現代が「企画」の時代であることを意識し、より優秀な「企画」をつくる能力―これを「企画力」と呼ぶ―を得るための方法を著者の体験に基づきながら提示してくれる。

まず、集団レベルにおける企画力獲得の手段として、「集団思考」というものがあげられている。著者の言う「集団思考」とは、集団構成員間に平等主義が成立しながら、ことなる専門家の知恵が結集することを指す。たとえば管理職・平社員混合のアイデア会議がそれである。この「集団思考」の行使により得られるのは、特定の個人の発想によらない「練り上げられた企画」である。このような集団による共有財産的企画は、構成員が互いの人間性を認め合い十分に議論を尽くすことによってはじめて生まれるものである。

さらに、著者はすべた共同研究（これも「企画」である）が日本の大学に育ちにくいのは、この「集団思考」の習慣が欠けていることが原因であると指摘する。自分の専門領域に閉じこもって知的交流に乗り遅れる教授・助教授。そして彼らの意識に追随するしか能がない助手。大学内部には、案外、このような例がみられるのではないだろうか。

つぎに、すぐれた企画者ほど大きな視野を見とおし理解する能力をもっているとする著者は、「まず全体的イメージを描くこと、次いで全体を見とおす敏示してくれるにとどまらず、我々に自己の置かれている状況の見直しをも迫っている一冊であるということができよう。（T）

中公新書　380円

テスクの片隅

合格者の皆さん、なにはともあれおめでとう。この新聞は当局による「百年」募金の欺瞞性にいちはやく気づいた優たちが、母外として十年前から配り続けてきたものです。今回より号数に加えて、内容も、大学生活の告白的私小説、読書紹介と新年面を開いてお届けしました▼大学という新しい地平の上に、皆さんは何を築くつもりなのでしょう。どうです、一緒に新聞づくりでもやってみませんか。

合格おめでとうございます

新入社員募集

■ 学内唯一の報道紙
■ 年6回発行（休暇月を除く月刊）
■ 5月中旬に新歓合宿予定

最近本紙でとりあげた課題
――大学祭特集・学生自治問題など学内課題はもちろんのこと、プルトニウムの恐怖・君は浩宮をみたか・原理研の実態・学内スポーツ報道など……

学習院大学新聞社
黎明会館316　TEL986―0221 内線260